

創作×ご飯の合同誌

# Companio

[カンパニオ]



目次

ハロウィンとかぼちゃポタージュ 巫夏希

ステア(前編) 河嶋レイ

四十路リーマンと女子学生の秋。 ボンゴレーノ麴

参加者一覧

## ハロウインとかぼちゃポターージュ

巫夏希

かぼちゃが余っちゃって——そう言った彼女は僕に段ボール一箱分のかぼちゃを差し出した。結局の所、穴を空けているところを見るとどうやらハロウインに使ったらしいけれど、後処理までは考えていなかったらしい。ま、別に良いけれど。

全部使っちゃって良いのかい？ と質問すると、少し分けてあげるから、とだけ言った。調理だけを頼んだ、ということか。別に構わないけれど、それは態度としていかほどなものか。

まあ、彼女は小学校の教師として毎日疲れているし、そのくらい彼氏である僕が何とかやっ

てあげること……役目としては上々か。

もってきたかぼちゃを早速切り分ける。そうしてワタと種をしっかりとスプーンで取り除く。

ここできちんと一手間加えておかないと、面倒だからね。

そういえばほかに野菜って無いかな？

僕の言葉に、彼女は頷く。

一通りの野菜なら、学校の野菜庭園にあるから使って良い、とのことらしい。それって他の教師に許可を得ているのか？ と聞いたところ、食育の一環だから問題ないとのことだった。だったら別に構わないけれど。

それじゃ、タマネギを使うことにしよう。

彼女に用意して貰ったタマネギ——言うまでも無いが、これも学校の野菜庭園から確保したものだ——をみじん切りにしていく。

タマネギのみじん切りといえば、目にしみて

涙が出る——なんてこともあるけれど、そんなこと知ったことでは無い。いや、別に悪気があるわけではなくて、ただ単純に、僕がメガネをかけているからそこに關しては問題無いと言う話だ。

ちなみに彼女は僕がタマネギを取り出した段階で警戒していたようで、水泳用のゴーグルを取り付けている。準備の良いことで。

野菜の下準備を済ませたところで鍋に火を掛ける。そして暖まった段階でバターをひとつかけら投入する。バターを溶かしつつ、僕は要領よくタマネギを炒めていった。

そういえば、ジャック・オー・ランタンってもともとカブを使っていたんだっけ。そんなことを彼女が不意に言い出した。片手にはスマートフォン。大方調べてそう言ったのだろうけれど、なぜこのタイミングで言い出したのかが気になる。別に関係の無い話だと思うけれど、強いて言

えば、それを言うのは僕じゃ無くて、君が担当しているクラスの生徒に言うべき話題じゃないか？

そんなことを考えていたらタマネギがしんなりとしてきた。火が通ってきた証拠だ。そうして僕はかぼちゃを鍋に投入していく。さっと炒めたら水とコンソメを加えて蓋を閉めて一煮立ち。

給食までには間に合うでしょうね？ との彼女の問いに僕は時計を見る。今は十一時を少し回った辺り。まあ、何も問題が無ければ間に合うと思うけれど。

そういう感じのことをすべてひっくり返して僕は頷くと、安心したようにほっと溜息を吐く彼女。よほど時間を気にしていたらしい。だったら給食のおばちゃんにでも頼めば良いのに。逆にそちらのほうが衛生的な気がするけれど。

追加料金払わないといけないからさ、と彼女

はスマートフォンを見つめながら僕の呟きにそう答えた。それはそうかもしれないけれど、それでオーケーを出す学校もどうかと思う。一応仕事にしているとはいえ、これは完全に奉仕活動だけ？

さて、そんなことを考えていたらかぼちゃが良い感じに煮立ってきた。鍋の蓋を開けると、かぼちゃの甘い香りが室内に立ちこめる。素早く灰汁をとると、弱火にして蓋を閉める。

ここでようやく休憩。僕は一度手を洗い、近くにあったパイプ椅子に腰掛けて、スマートフォンのタイマーアプリを起動する。

時間の設定は十五分。ま、ソシヤゲのクエスト一個分でもクリアすればちょうど良いくらいかな。そう思って僕は待ち受け画面のアプリをタップした。

イベントクエストをクリアして、勇者というよりは女戦士のコスプレをしているエリザナントかを仲間にしたところで、ちょうどタイマーが鳴り響いた。

手を洗い鍋の蓋を開けて、用意しておいた竹串でかぼちゃを刺す。すうっと竹串が抵抗なく通ったので、火が通ったことが分かる。

火を止めて、家からもってきた泡立て器を取り出す。そうしてかぼちゃを容赦なく潰していく。この行程が大事なのだ。いかにかぼちゃをなめらかにさせていくか。そのためにかぼちゃを柔らかくするまで煮詰めたのだから。

原型を止めていないくらい潰したところで、牛乳を投入する。これがクリーミーな味わいを生むので、入れないとね。まあ、入れなくてもいいけれど、かぼちゃって案外子供が嫌いな野菜

に入っていることもあるので、その辺りは注意しておかないと。『食育』を銘打っているならば、そこらへんも注意している。

牛乳を入れて混ぜて、火を掛ける。そうしてある程度煮立つか煮立たないかくらいのところまで塩こしょうを少々。味見をすると……うん、ちょうど良い味付けだ。かぼちゃの甘味が残っていて、かつ牛乳によるクリーミーな味付け、そうして、それらを引き立てるような塩こしょう。我ながら完璧にマッチングしている。

出来たよ、と僕は彼女に声を掛ける。彼女は仕事の中にもかかわらず寝息を立てていた。まあ、学校の先生という職業は大変だからね。一緒に暮らしている僕が身をもって実感しているから、そこは厳しく言わないほうがいい。

一杯分掬って、ポタージュを器に盛り付ける。そうしてそれを彼女に差し出した。

彼女はありがと、と言って受け取ると、スプーンも使わずにそのまま器に口づけて傾けていく。いくら僕しかいないからって女性なんだからそのあたりの身だしなみはしてほしいところだけれど……まあ、いいか。別にとやかく気にして欲しい僕でも無い。

一気に飲み干してしまったのか、次に器を見たときはその中身が空になっていた。そして、器に隠れていた彼女の子供のように無垢な笑顔が見えてきた。

美味しいよ！ 美味しい！

彼女は僕にそう言って、うんうんと頷く。

やっぱり君の笑顔は可愛いなあ。

僕はそんなことを思いながら、ポタージュの入った鍋の蓋を閉じるのだった。

終わり

## ステア (前編)

河寫レイ

ステア

ばかだなあ。誰かを傷つけたなら、その歌を歌いなよ。  
そこから歌は生まれるんじゃないの？

部屋の片隅のサイドテーブルに、ランプがひとつ灯っていた。その横にある細身の花瓶には、白いカラーの花が二本飾られている。白くて筒形のやわらかい花びらはそっと寄り添うように重なっていて、それはまるでこの世では聴こえない音楽を聴くために抱き合っているかのように見えた。彼女達はひっそりとして静かだった。深紅の薔薇やピンクのカサブランカのように艶やかではないけれど、慎ましくそして誠実に存在していた。彼女のくちびるは、まるでそのカラーの花のように静かで、ひんやりとしていた。少なくとも最初の三分間だけは。そして徐々に激しい情熱と欲望の色を重ねていく。そう、その夜わたしは、カラーの花の色は白だけではないと知ったのだ。そしてその色濃く鮮やかな赤は、少しずつわたしを狂わせていった。

彼女はいつもカウンターの一番端っこだで酔っ払っていた。わたしは元カレのタケシに頼まれて、ピンチヒッターで入ったバンドでバーのライブをしていて、どうにもその光景が目についてしまったのだ。

わたしの生活の上で、音楽は当たり前のように存在していた。歯を磨く、シャワーを浴びる。そして歌う。ベース弾きのタケシはわたしより六歳年上で腐れ縁。どこか兄のようなところもあり、音楽に関しては彼に感謝するところが大きい。だからタケシと別れてもわたしは音楽をあきらめたくはなかった。タケシとは音楽の趣味は合ったから、私生活さえ混同しなければ、それはそれでいいバンド仲間だった。いつの間にかタケシは恋人というより生活の一部、歌のようになってしまっていたのだ。つまり、燃え上がる恋などというものはバンド内では邪魔なだけで、必要なのは戦場を戦い抜く同志のような関係だった。

「ドア」はホールの面積もさほど広くない、アールデコ調の内装がシックなバーだった。白いカラーの花をシンブルにかつ惜しみなく使ったアレンジメントは店に品格を与えていて、ゴールドではなくシルバーを基調とした色の組み合わせが嫌味を感じさせなかった。オーナーはお金持ちの北歐人だそうで、ど

うやらそのオーナーの愛人である日本人女性が店を切り盛りしているという噂だった。流す音楽も平日はクラシックだったりスローなジャズだったりするらしいが、隔週末はライブを開く。わたし達は主にジャズやボサノヴァを中心に演奏する生バンドだが、リクエストがあればなんでも弾くなんでも屋だ。流行りの曲やスタンダードなナンバーならそれなりに演奏ができるスキルと経験はあった。客層はおしゃれな三十代が多く、彼らはわたしより少しだけ大人に見えた。

彼女は決まってライブの途中にふらつとやってきて、カウンターの奥に座った。最初のグラスを空にすると、座りなおしてカウンターを背にし、わたし達のライブを聴くふりをしていたけれど、それはただのふりで、実はなんにも聴いていなかったと思う。長い脚をクロスさせ、両腕を組んだり天井を見上げた。ついには横を向いてはつまらなそうにため息をつくので、わたしのボーカリストとしてのモチベーションはちっとも上がらなかった。その代わり彼女への興味はしだいに高まってゆき、どうしたら彼女の顔を見ることができのたろうかと考えた。わたしの歌で、声で、彼女の注意を引くことができた。だってわたしはボーカリストで、ライブの場を盛り上げたり、なによりもお客さんの心を揺さぶったりする存在でなければいけないんじゃないの？常に前向きな自分を自負するわ

たしは、彼女のような客への対抗策として、そういう目標を立てたのだ。

驚いたのはわたしが昼の仕事をしていたときのことだ。商業ビルの小さなブティックでバイトをしていたわたしは、ある日向かいの書店で本の整理をしている彼女を見つけて、かなり感動したのを感じている。あの酔っ払いが動いている。それは奇妙な感動だった。彼女の背は高く、背中にはあまり肉がつかない。手足は無駄に長く、バーではあまり役に立たなそうに見えたが、それらは書店には場違いなほどエレガントな動きで、わたしの目を満足させてくれた。その書店の店員さんはみな黒いエプロンを付けているのだけれど、彼女の服装はいつも白いシャツに丸首の黒い薄手のセーター、黒いスキニージーンズと決まっていた。たぶんそれを制服にしているのだろう。週に二、三度くらいは黒縁のメガネをかけてくるのだけれど、大真面目に見えるので、酔っ払った姿を思い出すと顔がにやけた。ただ時折片手でそのショートヘアをわざわざさせるのが癖なのか、たまに後頭部の一束がびよんと飛び出してしまうのがなんとなくも言えず、わたしの母性本能をくすぐった。お客さんが途切れる時間帯は、本棚の隅に行つて、ときたま人目を憚らず本を広げ鼻先を近づけるとその匂いがかぐともあるようだった。そしてその後は必ずどこか寂しそうな顔をしてそっと本を閉じ



た。彼女はどこか捨てた犬のような空気を漂わせていた。

「ねえ」

ある日わたしはタイミングをみて彼女に話しかけてみた。店頭ディスプレイを替えるふりをして、彼女が一番店の近くに寄ってきたときを見計らったのだ。

「ねえ、ちよつとその新人さん」

わたしに気付かないのか、彼女はあたりを見回した。

「こつちこつち。ミルフィーユの方。レディースファッション・ミルフィーユ」

ますますわからないといった顔をしている彼女の肩を指先でつつく羽目になってしまった。

「すつごくダサイ名前って思ってるでしょ？いいのよ、実際そうだから」

「はあ……」

「わたしもそう思ってるから大丈夫」

小声とはいえ店長に聞こえたらまずかった。だけど、この件に関しては裏では店長も同意している。オーナーのネーミングセンスがことごとく悪いのだ。どうやら姉妹店の名前もかなりダサイらしい。

「わたししのぶっていうの。よろしく」

「はじめまして」

彼女の瞳の奥に「なんだこの女は」という抵抗のランプが点いたと同時に、やわらかなオーガンジーのやさしさでくるんだほほえみがそれを打ち消す。彼女により一層の興味を覚えたのは、そのほほえみを剥がしてみたいという衝動に突き動かされたからだ。

「ナカヤマです。ナカヤマコウです」

低めの声でそう名乗ると、彼女は右の眉を少し上げ、用件は？というような表情をした。

「実はね、はじめましてじゃないの。わたし、あなたを見かけたことがあるのよ。ここじゃなくて、バーでね。あなた、あのバーによく行くのね」

彼女はわたしから目を逸らすと、ため息をついた。まずいことを言ってしまったのだろうかと思っただけ、わたしは負けていなかった。

「わたしね、夜はバンドでボーカルやってるの。ジャズやボサノヴァのね。あなたは聴いちゃいないと思うけど。そんなに下手じゃないのよ。よかったら今度は聴いてみてね」

彼女は顔を上げると、また例のほほえみでわたしを拒絶した。くちびるの端がわたしへの警戒心に満ちていた。

「じゃあね」

わたしは努めて明るい声を出して店の奥に戻った。今日はこれまで。深追いはしない。このひとを知りたい。このひとに近づきたい。そのオーガンジーのベールの奥を覗いてみたい。そう思ったのだ。

よく考えたら昔からそういう傾向はあった。学校で気に入った女の子がいたら、自分から声をかけて友達になった。ひとにはおっとりしているとと言われるが、人見知りはしない方だ。細かいことは気にしない。それは男のひとに対してもそうで、興味をそえられるひとがいたら自分から声をかけた。男女間の友情もありだと思っているし、過去にはそれなりの関係も持ったことがある。つまりわたしは人間というものが好きなのだ。けれど今回は今までは違っているように思えた。わたしは生まれて初めて、今までにないほど強烈に、ひとりの人間に興味を持ってしまったのだ。

その日以来、なにかと彼女に声をかけるようになった。おはよう。おつかれさま。根気強く、毎日。でもしつこくはしない。こちらから挨拶をすればあちらも挨拶はしてくれた。徐々にあちらからもするようにはなった。けれどそれと同時に、バーで彼女を見かけることはなくなり、朝の挨拶運動は失敗だったかもしれないと反省していたのだった。追えば逃げるタイプのひとだったのかもしれない。だからといって引くわたしでもない。

どうしたものか。わたしは頭をひねった。

その夜、「ドア」でのライブ予定はなかったけれど、わたしはどうしても行ってみたくなった。ひよっとしたら彼女はわたしたちのライブの日程をチェックしていて、ライブのある夜は来ないようにしているのかもしれないと閃いたからだ。これじゃあまるでストーカーじゃないの。だけどその夜は予定も入っていないのだから、自分だけのために飲んだっていいじゃないかという気になったのだ。幸いバーテンダーさんとは仲良くさせてもらっている。彼相手に少しひとり反省会を開くのもいいかもしれない。

「あらこんばんは、しのぶちゃん。今日ライブはないのにありがたいわ。いらっしやい」

「ヨシノさん……わたしになにか見繕って。今夜はちよっぴり酔いたいの」

「入ってきてすぐに……なに言ってるのかしらね。ここは酔っ払うバーじゃないのよ？」

「わかってるわよ……でもあんまりお金ないから、一、二杯で上手に酔って帰ります……」

「おばかさんね、しのぶちゃんは。じゃあわたしのおまかせでいいわね？」

「はい」

お酒を飲んでいるお客さんを眺めながら歌うことはあっても自分がカウンター席に座って飲むのはなんとも不思議なものでつい手持ち無沙汰になってしまふ。タバコも吸わないし、携帯をいじる気にもなれない。ここは早いところ、ヨシノさんに一杯適度に強いカクテルでも作ってもらわなくては、と思つていた矢先、背後に人気を感じた。

「いらつしやい、こーちゃん。また酔つてるの？」

わたしの背後を通り抜け、カウンターの奥の席に座る。いつもの定位置だ。

「ん……」

彼女だ。しばらく姿を見せていなかった彼女がようやくやってきた。しかもいつも通り酔っ払っている。わたしは目でヨシノさんに訴えた。

(ここは酔っ払うバーじゃなかったんじゃないの?)

(そうなんだけどね)

ヨシノさんは目をぐるりと回すと、休ませていた手を動かして始めた。そしてそれはわたしのカクテルとなるはずだった。

わたしは好奇心に駆られて彼女の背中をつついてみた。

「ねえ。わたししのぶだけど。ここで会ふの、久しぶりね」

わたしを避けてたの?とは言わなかった。やっぱりそれも自分はストーカーだと告白するようなものだからだ。

「ん……」

「わたし、これからちょっと酔うつもりなんだけど付き合ってくれる?といてもあなたはもう酔っ払ってるんだけど」

「……」

「こーちゃんにはこれ。しのぶちゃんにはこれね」

そう言うと、ヨシノさんは水を彼女の、アイステイーをわたしの目の前に置いた。

「わ!なにこれ強い!アイステイーじゃないでしょ、これ」

「ロングアイランド・アイステイーよ」

ヨシノさんは彼女を見ると、かわいそうにという顔をして、今度はわたしの顔を見た。

「それを飲んだら帰りなさい。こーちゃんの面倒はわたしが見るから」

なんとなくヨシノさんにわたしの魂胆を見透かされているような気がして、少し凹んだ。

「え?」

その日わたしは遅番で、店仕舞いの準備をしていた。背後に心配を感じて振り向くと、そこに彼女が立っていた。そして、この後飲みに行きませんかと誘われたのだ。しかもかなりぶっきらぼうに。彼女がすでに酔っ払った姿を見たことはあっても

飲み始めや酔っ払って行く様を見たことのないわたしにとってそれはいきなりエベレストに登りませんかと誘われているようなもので、かなり怖気づいた。いつかは誘おうとは思っていたけれど、こんなに早く、しかも向こうから誘われるとは思ってもしなかったからだ。

「えーつと……ちよつと待っててね。このストックだけ出してから行ってもいいかな？明日の早番のひとのために」

というのは嘘で、ほんの少しだけ心の準備をしたかったのだ。今日のこの服で大丈夫かな、化粧直しは、いや違う、まずはどのお店に行くんだろう、ちよつと待って待って、心の準備ができてない！

「じゃあ裏口で待ってますね」

「え？待つのはこのでもいいじゃない。そんなに待たせないから……えつとえつと……」

お客さん用の椅子に彼女を座らせてバックルームに入ると、手早く荷物をまとめた。もちろんリップも塗り替えた。

「お待たせ！さあ行こう。あ、でもどー行こうか？例のバー？それとも違うところ？」

「ヨシノさんのところで飲んだらお給料がいくらあっても足りないから」

「そうよね……ていうかそんなに飲むつもりなの？ヨシノさん

のところに行く前に行くお店があるのよね？そこ！そこ行こう！」

「あんまり女性向けじゃないかもですよ？」

「いいのいいの！雰囲気とかそういうのはいいの。わたしもバンド仲間の大半が野郎でしょ？だからそういうお店には慣れているの」

ふたりにでビルの裏口から出ると、電車で恵比寿まで行き、裏道を通って小さなバーに入った。おしゃれだけれど、コンクリートと、なにやら昔懐かしい産業用ミシンを思わせる什器、ごついカウンターテーブルのみの店内で、なるほどこれでは女性客は入らないかと思われた。そう、ヨシノさんのいる「ドア」とは対極な感じだ。

「こーちゃん、もう新しい彼女できたの？」

バーテンダーらしき若い男性が彼女に声をかけてきた。

「そんなんじゃないよ」

「こんばんはー。わたし、今日こーちゃんに誘われたばかりの女です」

ああそうか、きつと彼女はそれをわたしに伝えたかったのか。そういうことだったんだ。わたしの目の前に立派な壁を築きかけたわけだ。

「悪いこと言っちゃったな。最初の一杯、サービスしときます

よ」

「こういうときはなんて言ったらいいんだろう。「ラッキー」それとも「酷い」？ だけどわたしにとってそんなことはどうでもよくて、どさくさに紛れて彼女を「ーちゃんと呼んでしまった自分の勇気を褒めてやりたかった。」

「ーちゃんはいつも何を飲んでるの？」

「さあ……どうでもいいから、なんでもいいかな」

「ということは、このひとが出すものをただひたすら飲むって感じ？」

「そう」

「そんなに悪いのは出さないよ。僕 イッテツっていいいます。

「ーちゃんとは、ハンス繋がり。『ドア』のね」

「ハンス？ あ、あそこのオーナーさんって外国人なのよね？」

「仕切ってるのは日本人女性だけだね」

「ここは『ドア』よりもっと気軽にに入れる感じ。わたし、これからはここに来ようかな」

「いいけど、僕がヨシノさんに怒られちゃうよ」

「わたしね、『ドア』のライブでボーカルやつてるの。でも自分ひとりで飲むなら、こつちのほうが気軽に来れるかな」

「あつちは値段が高いからね。ってあれ？ じゃあーちゃんと前は前から知り合いなの？」

「違うの。実は同じ職場っていうか、たまたまバイト先が同じビルの中ってこの間気付いてね。彼女の方はそれに全然気付いてなくて。っていうか、わたしが『ドア』で歌ってるってことさえ知らなかったのよ、彼女」

「あーさもありなん。ーちゃんはね、そういうひとなんですよ。冷たいの。よく知らないひとにはね」

ふと隣を見ると、彼女はただひたすらペッパーピーナッツをつまみながらロングアイランド・アイステイラーを飲んでる。

「イッテツさ、バーテンダーはそんなにペラペラしゃべるもんじゃないよ。ヨシノさんを見習いなよ。あのひとはすごいよ。修羅場をくぐってるよ」

「はいはい、わかりましたよ。ヨシノさんはーちゃんの修羅場を何回も何回も見てきましたよ。僕はたったの一回こっきりですけどね」

なるほど、イッテツくんはたとえ一回こっきりでも彼女の修羅場を見たことがあるわけか。ピーナッツひと粒がわたしの頭上をミサイルのごとく通過した気がしたが、イッテツくんのリーダーがそれを素早く感知し、事なきを得たようだ。イッテツくんは彼女を見ると舌をペロツと出して笑った。彼女の瞳はすでにアルコールの影響を受けていて、ほんのり熱を帯びていた。そこにはどうしようもない喪失感と行き場のない情熱が入り混

じつていて、時折つく彼女のため息が、なぜかわたしの胸を熱くした。

イッテツくんは、口は軽そうだったけれど悪気はなく、むしろよい話相手になってくれた。相変わらず彼女は無口で、ただひたすら飲んでる。その割には減らないので、彼女は大酒飲みではないらしい。

「そういうことだから」

「は？」

いきなりそう言われてわたしは面食らった。

「えーと、なにがそういうことなのかな？」

「どうやらわたしに興味があるらしいけれど、わたしには近づかない方がいいよ」

彼女が言いたいことはわからなくもなかったけれど、そんなことを言われる筋合いはない。

「えっとね、わたしは自分が近づきたいと思うひとに近づくの。あなたは面白そうなひとだし、ちよつとちよつかい出したかっただけ。いけないかしら？」

意外だったのか、彼女がひるんだように感じた。

「わたしはわたしがいいなって思ったひとに近づきます。男でも女でも関係ない。友達ってそういうもんじゃない？嫌なら引き下がりますとも。そりやもうあつさりだね。でもね、その前

に、わたしの歌をちゃんと聴いてから嫌って言うてくれる？」  
説得力もなにもない支離滅裂なロジックではあったけれど、売られたケンカは買わなきゃ女じゃない。

「女なんて信用できないね。友情ってやつも」

「いくら何度も修羅場をくぐったからって、わかったような口を利かないでよ。じゃあさ、ケンカついでに、今度のライブに来なさいよ。で、そこで決めたらどう？あなたの心を動かすことができたらわたしの勝ち。あなたはわたしと付き合うの。もしあなたの心が微塵も動かなかつたら、わたしの負け。もうあなたに声もかけないから。あなたはあなたの次の修羅場でも探してよ」

我ながら大した啖呵の切りっぷりだった。これじゃあまるで押しかけ女房だ。しかも彼女の心を動かす？「ドア」のお客さんの心さえ動かすことができていいのか不安なのに？

「わたしと付き合うってことがどういうことか知らないで、よくそんなこと言えるね。いいよ、行ってあげるよ、ライブに。今度は酔わないで行く」

イッテツくんがリネンでグラスを拭きながらやれやれという顔をしている。でもなにやら嬉しそうにも見える。きつと長い間彼女の空白につき合ってきたのだろう。彼はわたしに軽いウインクのエールを送ってきた。

(がんばれ)

そうだ、確かにがんばれ、だった。わたしは彼女の心を動かさなければならぬのだ。彼女のオーガンジのペールのもつと奥まで忍び込んで、その心臓を熱く焦がさなければならぬのだった。

ライブまでには時間はあった。店側の都合でライブの日に被る貸し切りが二回連続で入っていたから、一カ月弱は時間的な余裕があったのだ。それにしても「今度のライブに来なさいよ」なんて言っただけのもの、言っただけから後悔していた。誰かのために歌う？ たったひとりのために？ そんなことはしたこともないし、果たして許されるだろうか？ そんなボーカルがいていいはずがない。歌は聴衆のものだ。その歌を聴き、自分の人生を重ねる。恋の歌には自分の恋を。つらい人生の歌ならつらい自分の人生を。ボーカルの主観など入れていいはずがない……なんて考えていると、ササキから声をかけられた。

「珍しく頭から湯気が出ているけれど、あんたどうしたの？」  
相変わらず失礼だけどタイミングよく突っ込んでくれたので一世一代のライブになりそうだから、ある曲をこれ以上なくらい煽情的にアレンジして、わたしに歌わせてほしいと頼みこんだ。彼女は実に素晴らしいアレンジャーでもあって、彼女に泣きつけば大抵の名曲は瞬く間にわたし達のバンドにしっくり

くる曲として上がってくる。なので、ここは彼女に借りを作ることにした。

「なに？ いい男でも見つけたの？ タケシが泣くよー？ まだあなたに気があるみたいだし」

「それはないでしょ」

「あんた鈍いからね」

「とにかく次のライブでこれを歌いたいんだってば」

「それぞれ。それが珍しいんだって。これが歌いたい、だなんて」

「悪い？」

「悪くないわよ。いいわよ、そういうのが大事なんだって」

「じゃあアレンジお願いね」

「アレンジはいいんだけどね。この歌詞さ、ヤバイよ。ピヨンセ姐さんの歌でしょ？」

「そうなんです」

「原曲は、聴いている分には元気があっていいなーって感じだけど、歌詞が歌詞だし、しかもアレンジもセクシーになって……あんたに歌えんの？」

「失礼な」

「とにかくあたし、アレンジがんばるわ。でもってあんたもがんばって」

なにががんばって、よ。

そうこうするうちに次のライブの日が近づいてきたので、わたしは彼女にその日程を事前に伝えておかなければいけなかった。次回のライブの日を知っているのかもわからなかったし、やはりここはキッチンと招待するべきなのだろう。職場の休憩室で一緒になったときに、わたしは彼女に声をかけた。幸いこの間のケンカのおかげというかなんというか、わたし達の仲は急速に近づいてはいた。

「知ってるよ。十月二十一日の土曜日でしょう？」

「なんで知ってるのよ」

「冬子さんに聞いた」

「冬子さんって？」

「あの店の経営者」

「ママさんか……こーちゃん、ママさんとも親しいの？」

「まあね」

相変わらず彼女は無口で小憎たらしい子供の様だった。なのに、うちのとなりのブティックに勤めている年上のお姉さまにはやけに可愛がられていて、休憩室で会う度に飴ちゃんやら旅行のお土産のお饅頭をもらっているのだからやっつけられない。彼女の照れ笑いはおばちゃん達の心を溶かす。おばちゃん達は

彼女を放っておけないのだ。

「とにかく来てよ。約束だからね」

ライブ当日。サウンドチェックも終わり、従業員用の休憩スペースで雑談兼ライブ前の腹ごしらえをした。ヨシノさんが、グリルドチーズサンドイッチを差し入れとして持ってきてくれたのはありがたかった。

「これね、ただいま絶賛研究中なの。新しいメニューにどうかって。『ドア』の雰囲気には合わないけれど、あなた達が気に入ってくれたら賄い飯に採用よ」

ヨシノさんのウインクはとても素敵。彼がこの店にいてくれて本当に良かったと思う。実際彼が「ドア」を切り盛りしているようなもので、ヨシノさんこそがこの店の雰囲気のようなものを生み出しているのだった。

「ねえ、あんたの男が来たら教えてよ。顔でも拝むからさ」

ササキがひそひそ声で耳打ちしてきた。うーん、男じゃないんだけどね。なんと説明したらいいかわからないから、適当なことを言っておいた。タケシは新しいレパートリーが増えていいことだと言っていたから、特に気にしなくてもいいようだ。

ライブタイムである八時半がやって来てあたりを見回すと、



いつものカウンター奥に彼女の姿が見えた。黒のボウタイブラウスはボウの位置が深く、彼女の華奢な鎖骨をさらうつくしく飾っていた。長めの前髪が目にかかっている彼女の瞳はよく見えなかったけれど、観客の幾人かは男女を問わず、彼女の存在が気になったようだ。よくよく見れば、彼女の細目のベルトと先の尖ったローヒールのパンプスは深い赤で、なるほどこのひとはどこか中性的な感じを匂わせるのに、誰かを挑発する気とは忘れないらしい。上目遣いで自分の人差し指を齧るのだけは、やめておいた方がいいと思う。たぶんそれは誰かを勘違いさせるから。

ササキが穏やかに鍵盤に指を走らせた。ライブが始まることを知らせるためだ。彼女は、口こそ悪いが演奏スキルは極めて繊細だ。感情の機微つてやつを指先で表現できる稀なひとでもある。続いてベース、ドラム、ギターが入る。そして最後はわたしの歌声で始まるのだ。

『ラ・ヴィ・アン・ローズ』はエディット・ピアフの有名な歌だけれど、残念ながらわたしはフランス語ができないので、ルイ・アームストロング・バージヨンの英語で歌うことにしている。愛するひとと共にいるよろこび。今のわたしには縁のない感情ではあるけれど、それは温かく愛おしいものに違いない。お客さん達は今夜もそれぞれ友人や恋人を連れてこのバーにや

って来ていた。共に時間を過ごすことに男女の差はないはずで、今この瞬間に感謝せずにはいられないはずだ。ただ、ひとりを除いては。

演奏は続いていたが、彼女といえは相変わらず冷めた瞳でわたしを見つめていた。いや、そうではなくて、見つめているのはわたしのマイクかもしれない。こんなことならバンドに背を向けてもらった方がよかったのかもしれない。わたしの歌は単なるBGMでしかないのだろうか？

最後の一曲となったところで、わたしは水の入ったグラスに口を付けた。一瞬彼女と目が合ったが、彼女は席を立とうとしていて、スツールから腰を浮かせているのが見えた。待つて、まだ帰らないで。そう口から飛び出そうになったところで、ササキがイントロを弾き始めた。

「こんばんは。今夜は『ドア』へようこそ。これがわたし達最後の曲になります。恋するみなさんへ。狂おしいほど恋に溺れる夜を。『クレイジー・イン・ラブ』」

わたしはササキに、ピアノを前面に出したアレンジを頼んでいた。原曲は下手をすると、アメフトやバスケットボールの応援ソングにでもなりそうな曲調だから「ドア」にふさわしいアレンジが必要だったし、なによりも今夜のこの歌は、わたしを彼女に捧げるための歌でなければならなかった。

この歌の導入部はわたしのため息のような声で始まる。正直わたしはこんな声を出したことはない。恋に狂ったことも、溺れたこともないし、その狂おしい相手に愛を求めたことだってなかった。だけど、わたしはそれを、その狂おしい欲望を、この歌に乗せて贈らなければならなかった。

結局その夜、わたしは初めて自分の空っぽな体に気付いたんだと思う。かっこよく啖呵を切ったものの、自分の中にはいものを誰かに差し出すなんてことはできないのだ。歌がうまいボーカルなんて星の数ほどいる。だけど、自分の身を削りながら歌うボーカルはどれほどいるだろう？ひとの心を打つ歌には、歌うひとの人生が詰まっている。要するに、わたしに恋を歌わせたところでなにひとつ詰まってやしないのだ。恋のしあわせも、苦しみも、安らぎも、狂気も。

気が付けばライブが終わるまで、彼女はカウンター席に腰かけていた。最後の曲と聞いて、それならと座り直したのだろう。今夜の感想は今度会った時にでも訊くことにしよう。今はまだ彼女の顔を見ることができなくて、わたしは下を向きながらマイクを片付けた。そしてメンバーと一緒に楽器を引き上げると、休憩スペースを借りてミニ反省会を開いた。メンバーからお褒めのことばをもらったのは意外だった。いつもより情感がこもっていたとか、男でもできたのかとか、声に艶が出たとか。だ

けどわたしには敗北感しかなくて、弱々しい笑顔でありがとうとしか答えられなかった。

裏口のドアを開けると雨が降っていた。幸い折りたたみ傘は持ってきているし、ずぶ濡れにはならず帰れそうだった。

ビルの脇道に人影を見つけたのは傘を開こうとした瞬間だった。

「こーちゃん？」

雨で濡れた前髪が、彼女の涼しい瞳を覆っている。きっと少し前から店の外で待っていたに違いない。わたしは打ちひしがれていて、彼女がわたしの歌をどう思ったのか訊くことさえ忘れていた。

「傘は？」

「持ってきてない」

「どうして？」

「寒いよ」

「みんなと一緒に帰る？駅まで行くの？」

「嫌だ。知らないひとばかりだから」

「バンド仲間よ？紹介しようか？」

「嫌だよ」

わがままを言う子供みたいな彼女は、傍から見たら嫌なやつなんだろうなと思う。声をかければ嘔みつきそうな顔をしている。

すると突然前にいたササキが振り向いてわたしに囁いた。

「この子、あんたを待ってたのよ」

「は？」

「この子のために、あの曲をあたしにアレンジさせたんでしょ。ばかね。曲名通りだわ」

秋の雨は嫌いだ。降り始めたらそう簡単には上がらない。気温が落ち込み始め、バンドは即解散となった。ササキがひらひらと手を振る。なによ。なにが言いたいのよ。わたしはこの目の前の彼女をどうしたらいいのよ。

「熱いコーヒーが飲みたい」

「あ、うん……ちよつとなら付き合えるかも。明日は早番で、

今夜は早めに家に着きたいかなーなんて……」

「いいよ。わたしも明日は早番」

「じゃあ、イッツテツくんのとこ行くか？確かあそこもコーヒー出してたよね？」

「イッツテツのとこは嫌だ」

「もぅ……じゃあどこがいいの？」

「わたしの家においでよ。ソファアベッドもあるから、終電逃したら泊まっていてもいいよ。中目黒にある」

「えーっと……お泊りの準備とかそういうの何もしてないし、衣装の入ったバッグとかあるし、それをそのまま明日の朝職場

に持って行くっていうのもあれというか……」

「じゃあ行くか」

「え？」

彼女はわたしの傘の中に入ろうともせず速足で歩き出した。雨に濡れるのは気にならないのか、顔に降り注ぐ雨の雫を細い指で拭いながら、やや低い声でわたしを説得するのだった。

「コーヒーがだめなら、アールグレイかアッサムくらいならあるよ」

(そういう問題じゃないと思うんだけど……)

「コーヒーは嫌い？」

「好きです……」

「カフェ・ロワイヤル作ってあげる」

「かふえろわいやる？」

「ブランドーを使うんだけどね。うちにコニヤックがあるから、それを使うよ」

「なんでそんな高級なものがあるの？」

「ただだきものだよ」

「誰から？」

「秘密」

「ふーん」

「おいしいよ？」

「じゃあ行こうかな？」  
「おっけい」

わたし達は終始無言で移動した。ライブの感想も訊けず、彼女の音楽の趣味さえ訊けず、ただただ無言で移動した。地下鉄も歩道も、途中で寄ったコンビニも。わたし達はひと言も話さず、ただひと息分だけの距離を保ちながら歩いた。彼女のマンションと思われるビルに入り、エレベーターを待つ間、わたしの右手がふと温かくなった。彼女の手のひらは温かく、雨に濡れ冷えてしまったわたしの手の甲を温めてくれた。エレベーターのドアが開き、中へと入る。彼女が五階のボタンを押すと一瞬ふわりと体が浮いたように感じた。上へと上がるエレベーターの音がわたしの高鳴る心臓の鼓動をかき消してくれたらしいのに。エレベーターが指定階で止まりドアが開く。彼女は左へ進むと、非常口の前の部屋のドアの鍵穴にキーを差し込んだ。

彼女は玄関で赤いローヒールのパンプスを脱ぐと、裸足ですたすたと前を歩いてキッチンへと入り、照明を点けた。冷蔵庫を開け、ビotchャーを取り出し、カップボードからグラスを取り出して水を注いでくれた。広くはないキッチンではあるけれども、ダイニングスペースとの間にアイランドがあり、狭さは

感じない。間接照明をひとつずつ点ける。するとなんとなく部屋の様子がわかってきた。ここはワンルームじゃない。それどころかたぶん何部屋もある立派なマンションだ。天井は高く、壁も床も普通のマンションとは様子が違う。リビングにはクリスタルガラスのシャンデリアまでぶら下がっているが、ソファーやテーブルはシンプルでモダンなデザインだ。なにやら北歐クラシックとでもいうのか、室内もまるで「ドア」のようなインテリアで飾られていた。こ丁寧に白いカラーの花まで飾られている。

「ここ、こーちゃんのマンションなの？」

わたしはキッチンでわたしの様子を見ている彼女に声をかけた。

「イエスでノー。わたしはみつつあるうちのひと部屋を間借りしているだけ。このユニットの管理を任されている。ゲストが来た時のためにね」

「誰のなの？」

「ハンス」

「ハンスって『ドア』のオーナー？」

「そういうことだね」

「で、あなたは副業としてここのお掃除をしたり？」

「気が向いたらゲストの世話をしたりね。そんなにしよつちゅ

「来るわけじゃないけど」

「だからなのか、このリビングには生活感がまるでない。」

「わたしの部屋、見たい？」

「あ、うん……」

自分の荷物をこのインテリア雑誌のようにうつくしいリビングに置く勇気はなくて、彼女の部屋にも興味があったから彼女の後ろをついて行った。

「あのリビングじゃ落ち着かないでしょ？」

「そうね、あそこでくつろぐ気はしないかな。ゲストさん達はどうか知らないけど、わたしには無理」

どうぞ、と言って彼女は自分の部屋のドアを開けてくれたので、わたしは衣装とアクセサリーが入っている大き目のバッグを入口近くの床に置かせてもらった。

「これだけ？」

「うん」

セミダブルのベッドとサイドテーブル、デスクとチェア、デスクランプ、そして二人掛けのソファとコーヒーターブル。必要な家具はもちろんある。でもいくら壁面収納があるにしても、この生活感のなさはいったいなんなのか。

「ねえ、ここも落ち着かないかも」

「え？どうして？」

「なんていうか、ここで生活してるっていう感じがしないから」

「ゲストが来たらわたしはその間出ていかなきゃならないから持ち物は少なくしてる。いざとなったらスーツケースひとつでゲストハウス泊まりだよ」

「そうなの？管理人も結構大変なのね」

よく見ると真つ白な壁面にはたくさんモノクロ写真が飾つてある。それは誰かと一緒に旅行に行った時の写真とかそういう類のものではなく、アートに近いもの。ひよっとしたら彼女が撮ったものなのかもしれない。わたしはひとつずつ眺めた。

「女性のポートレート写真はっかりね」

「うん」

「なんとというか陰影がすごくいい。これはこーちゃんが撮ったの？」

「写真が趣味だね」

「ふーん」

被写体の女性はどれもカメラから視線を逸らしていて、なにかをしている途中をほんの一瞬切り取られたように見えた。空を見上げていたり、ノートに何かを書きとっていたり。その切り取られた空間や時間から、静かな物語が聞こえてきそうなのに、そんな写真だった。

「カフェ・ロワイヤル、作るよ。ちよっとキッチンでコーヒー

を淹れてくる。一番のクライマックスは、ここで披露するでしょう」

わたしも手伝うから、と一緒にキッチンまで付いていった。

彼女はコニヤックのボトルを取り出すと、ミルクピッチャーにコニヤックを少しだけ注いだ。このいて座のマークのようなロゴには見覚えがある。確か高いやつだ。角砂糖の入れ物とミルクピッチャーを持たされ、じゃあ部屋で待ってるとキッチンから追い出された。

ふーん……。それにしても。書店のバイトとこの部屋の管理人。それで生活できるんだろうか。それよりも、彼女と「ドア」のオーナーの関係も気になるし、なによりモデルの女性達との関係も気になってきた。中には半裸のモデルもいるし、これは一体全体どうやって撮ったんだろう。「じゃあこれから撮るんで脱いでくださいねー」とかお願いするの？それを言うのもあれだけど、それを言わなくても撮影できる関係の方がもっと気になる……。

「お手洗い借りてもいい？」

部屋のドアを少し開けて声を上げた。

「どうぞ。キッチン側にちよつと戻って、その白いドアを開けて。ゲスト用のレストルームだから」

言われた通り、白いドアを開ける。白い陶器の四角い洗面台

と、トイレ、シャワー。洗面台にはハンドソープとハンドクリーム。どれも横文字で書いてある。

(なにこれ、ホテル？用を足すのにも緊張するじゃない……)

手を洗って真つ白なタオルで手を拭く。ハンドソープのいい匂いが空間に漂って、やけに自分が清潔になった気がした。

「もうこの家！どこに行っても緊張するんだけど！」

彼女の部屋まで戻ると、コーヒーのいい匂いで包まれていた。淹れたてのコーヒーが明らかに高そうなスペシャルゲスト用のコーヒーカーップに注がれている。大きなことに、お揃いのソーサーまで付いていないか。

「あらかじめ温めておいたこのロワイヤルスプーンに角砂糖を置いて、カップの縁にこうやって掛けたらコニヤックを注いで浸す」

ミルクピッチャーにコニヤックを入れる理由がようやくわかった。なるほどそれで量を調節するわけね。

「そしたら……」

「あ！そこで火を点けるのね。アルコール分を飛ばすんだ」

「そう」

そう言うと彼女はライターで角砂糖に火を点けた。

「ねえ、部屋の電気を消してくれる？後ろにスイッチあるから」  
わたしは後ろを振り向き部屋の明かりを消した。

## お知らせ

「ステア」後編は、第二十五回文学フリマ東京・鳶田井書店ブース (F-31/32) にて販売予定の、新刊『ステア』でお楽しみください。シリーズ作「コピ」「週明けに」「イクエータ」も収め、全編に加筆・修正した連作短編集です。

※この作品はフィクションです。

## 河鳶レイ

海外在住の根無し草。

文芸サークル「鳶田井書店」店主。

短歌同人誌 Cahiers (カイエ)、歌集「花と剣」、小説「化身の森」、

写真集 "Walking in the Shade"

Twitter: ray\_kwsm

note: [https://note.mu/ray\\_kwsm](https://note.mu/ray_kwsm)

個人ブログ: [http://blog.livedoor.jp/ray\\_kwsm/](http://blog.livedoor.jp/ray_kwsm/)

鳶田井書店ブログ: <http://shimadaishoten.hatenablog.com/>



四十路リーマンと女子学生の秋。

ボンゴレーノ麴

「これやりたい！」

そう言ってきたのは、例の如く  
に後輩夫婦の娘。そしてこの小さな  
アパートの一室に入り浸る少女  
だった。

「……二日酔いの頭に、そういう  
の、響くから」

「お酒が残ってる日はしじみのお  
味噌汁だよね！ 任せて！」

全くかみ合わない気がしている  
会話の中で、彼女は一冊の漫画本  
をこちらに見せてくる。煎餅布団  
の中でまどろむこちらのことなど  
お構いなし。無遠慮さも美德とい  
えるのだろうか。彼女は学校でも

そこそこの人気を博しているよう  
で、最近持たされたスマートフォン  
はひっきりなしに鳴っている。  
それにしてはあまり触っているよ  
うに見えなかったので聞いてみる  
と、「あんまりたくさんの言葉は疲  
れちゃうから」と言っ、スマー  
トフォンを、ぽい、と鞆に放り投  
げていた。「パパママとか、大事な  
人の着信音は変えてるから大丈  
夫！」とは彼女の弁だ。

さて、その彼女が見せてきたの  
は、漫画の中で冷蔵庫の掃除をし  
ているシーンだった。  
掃除といっても、隅から隅まで  
磨き上げましょうという意味合い  
とはちよっと違って、冷蔵庫  
の中の食材を全部使いきろうとい







う試みだ。なるほど、確かに占い  
食材はどこかでタイミングよく消  
費しなければならぬ。しかし、  
何故このタイミングで、と痛む頭  
をさすりながら半身を起こそうと  
する。が、呆気なく横っ面へ頭痛  
がダイレクトアタック。あえなく  
布団に逆戻りだった。しじみ汁を  
作るなら早くしてほしい。この  
際、自分の娘ほどの年齢差もある  
相手に頼む情けなさには目を瞑ろ  
う。

「……っつーか、そんなに食材買  
ってた覚えはないけど」

「んもー、自炊しないからだよ！  
私がたくさん入れてたお肉も野菜  
もちっとも減ってないんだか  
ら！」

確かに一週間に二回はくる彼女  
の作る料理を消費するのに精いつ  
ぱいで、自分では何も作る気力は  
なかった、気がする。朝食は野菜  
ジュースだけで事足りるし、昼食  
は社食か出先。夕食はそのへんの  
牛丼チェーンで済ませればいい。  
そんな生活習慣が、思い出す限り  
には続いていていた。

「待ってて！」

言うが早い。か台所で数少ない調  
理器具を駆使しながら、驚くべき  
スピードで彼女はありとあらゆる  
皿と皿という皿を埋めていった。  
ポテトサラダにはソーセージと  
ベーコンをたっぷり。一パック近  
くの卵で作った厚焼き玉子の中に  
は甘く煮つけた切り下し大根がざ





く切りになつて入つていた。炒り卵とオクラと豆腐のチャンプルに、茄子の煮浸し。塩昆布とキャベツの和え物。大根と人参へ味を染み込ませたモツ煮に、炊飯器が大活躍した豚の角煮。キノコとパプリカがたっぷり入ったさつまいものホイル焼き。肉団子の甘酢あんかけ。しじみの味噌汁にはとろろ昆布も溶かされている豪勢さだ。

布団の中で再びまどろんでいたうちに、こんなことになっているとは露知らず。

和洋折衷ながら、空腹を思い出させる香りに、ぐう、と腹が鳴った。

その音に気付いた彼女がにっこ

りと笑い、ちゃぶ台に乗せられるだけの料理を乗せる。外に溢れてしまったのはちらし寿司の入れられたサラダポウルだった。

「お酒はほどほどに！ パパも言つてた！」

「へいへい……：しっかし、これ、いくらなんでも作りすぎでしょ。食べきれんのかねえ」

むしろ、この日のために食材を買い足してきたのではと思うくらいに量である。

至極もつともな質問を投げかければ、彼女は頬を膨らませて拗ねた顔をした。その顔は、彼女の母親によく似ている。

「いいの。おなか一杯食べるのが大事なんだから！」





言っている意味が分からず首を傾げつつちゃぶ台の前に座れば、今度は唇を大きく開いて笑みの形を作りながら喋ってくれた。「ひもじい気持ちはいけないんだよ。ひもじい気持ちっていうのは友達が多いんだから、『さみしい』とか『つらい』とか『くるしい』とかを連れてくるの。そういうのを振り払うにはね、お酒じゃダメなの。あつたかいご飯をたくさん食べないと」

ね、と彼女は茶碗を差し出してくる。ちらし寿司の他に、白米もきちんと用意していたようだった。湯気の立つ米を、言われるがままに受け取った箸でひとすくい。

小さじ一杯分くらいを口に放り込めば、舌の上にしんわりと温かさ広がる、みるみる唾液が溢れてくる。米の甘みを感じながら、大皿から直接肉団子を取って齧った。歯を立てた場所から溢れる肉汁が、あんと混じりながら白米の上で零れる。そこをすかさず箸で集めて掻き込む頃には、二日酔いの頭痛もどこかに忘れ去っていた。

「冷蔵庫にたくさん入れてくよ。冷凍庫にも。だから毎日ちゃんと食べてね」

そう言われて、初めて自分が、ここしばらくの間随分情けない顔をしていたことに気が付いた。顔をうまくいく箸だった案件が急に





他部署の上司からの横槍で頓挫して、それでもどうにか形にできないかと毎日プレッシャーに追い立てられる日々。昨日は、週末ということもあって、つい年甲斐も無く酒に逃げようとしてしまったのだ。

しかし目の前に並ぶ料理たちを見ると、それがただの子供のワガママだったり、若かりし頃の現実逃避のように感じられた。

来週になったら、このキャベツのようにバリバリと、頭からかじってやれそうだな、そんな気持ちにもなってくる。

「いただきます！」

お行儀よく両手を合わせた彼女の手は、この部屋の『さみしい』

も『つらい』も『くるしい』をも埋め立てていく。きつとそうに違いない。

そして独り暮らしには似合わない大きさの冷蔵庫も、彼女のやさしさで満タンになって、明日からは弁当を会社に持参する前提で、三食腹一杯に食べてもしばらくは消えることはないだろう。さつまいもの尻尾をかじりながら、体重計を買おう、と密かに思った。

【終】



参加者一覧（掲載順）

巫夏希(@natsuki\_miko)

10月のイベントといえばこれは外せないでしょ！ と思ってハロウィンネタにしました。

主人公がプレイしているゲームについては、皆さんのご想像にお任せします。それではまた！

河寫レイ(@ray\_kwsm)

バーって最近はなかなか行く機会がなくて悲しいのですが、たまりにふらつと行きたくなくなります。昔は静かなバーが苦手でした。今は賑やかな方が苦手です。強いお酒を少しだけいただくのが好きです。

ボンゴレーノ麴(@peperoncino\_k)

ご迷惑をおかけしつつ、どうにか原稿を受け取ってもらうことができました。ボンゴレーノ麴です。冷蔵庫の一斉掃除って、実はすごく懂れたりします。ちなみに出てきた料理は全部私の好物です。これを書いている今、とてもおなかがすいています！ひもじい！

豆崎豆太(@qwerty\_misp)

とか言っていたんだけどきつつ散々発行が遅れてすみません。